

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：42502

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21531039

研究課題名（和文） 医療保育における保育支援過程のモデル構築

研究課題名（英文） Model building process of childcare support in medical care

研究代表者

高橋 みゆき（TAKAHASHI MIYUKI）

聖徳大学短期大学部・保育科・講師

研究者番号：90528291

研究成果の概要（和文）：医療に携わる保育の領域である病棟・病児の保育現場の実態把握のため、アンケート調査を実施し、その結果をもとに各領域の保育の専門性について考察した。また、医療職からみた保育士を同時に分析し、保育士が専門性を発揮し医療チームの一員として位置付けられるためには保育記録の方法と記録内容の充実化を図り、保育士自ら協働を推進していくことが重要であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：To grasp the actual situation in the field of child care for sick children is an area of childcare-ward involved in medical care, a survey was conducted. Expertise in childcare were discussed in each region based on the results. Also, in order to be positioned as a member of the medical team to analyze simultaneously the nursery as seen from the health profession, a nursery teacher demonstrated expertise is aims to enrich the content and recording method of recording child care, the collaboration itself nursery that it is important to promote has been found.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：病棟保育・病児保育・専門性・保育記録・協働

## 1. 研究開始当初の背景

近年の少子化傾向が小児医療現場に及ぼす影響は大きく、病棟の閉鎖や縮小・混合化、入院する子どもの重症化と、子どもと家族がおかれている状況は深刻である。そのような状況のなか、エンゼルプランへの病後児保育の導入、2002年の診療報酬改正では病棟での保育士配置が保険点数化されるなど、医療現

場で働く保育士が注目されるようになってきた。また、医療に携わる保育士への現任教育もさまざまな形ではじまっており、2007年には「医療保育学会認定・医療保育専門士」資格認定制度がスタートした。しかし、一方では、保育士の専門性が問われているのが現状でもある。

そこで、医療現場で働く保育士の業務内容

を的確に把握し、基礎的かつ現実の問題に対応した医療保育のあり方の検討が必要であると考へた。対人援助職である保育士が専門的な知識と技術に裏付けられた判断のもと行っている保育支援過程を明らかにし、今後の保育の方向性を探るべく、本研究を行った。

## 2. 研究の目的

本来であれば、実態調査をもとに保育士の介入方法及び判断過程について明らかにし、医療保育のモデル構築を試みる予定であったが、保育現場の実態把握のために行うアンケート調査実施の段階で東日本大震災が発生したため、医療機関へのアンケートを延期した。そのため、研究当初の計画を大幅に変更した上で研究を行い、その結果をもとに医療保育のあり方をまとめ成果とし、ここに報告する。

### 研究（1）

医療に携わる保育の領域である病棟保育（療育含）・病児保育の保育現場の実態を調査する。

### 研究（2）

病棟保育と病児病後児保育の保育内容を分析し、医療に携わる保育支援の充実を目的とする。

### 研究（3）

他職種からみた保育を分析し医療現場における協働のあり方を考察する。

## 3. 研究の方法

### （1）調査方法と内容

全国の小児科研修病院 510 施設、2010 年病児保育協議会登録病児・病後児保育室 448 施設の院長宛に研究依頼文書と調査票を同封し、保育士・医療職（医師・看護）に回答を依頼し、アンケート調査を実施した。期間は、2011 年 11 月から 12 月であった。

アンケートの内容は、回答者の職種、施設概要、保育士の有無と人数、保育士の雇用形態、保育士の業務内容に関する内容とした。

### （2）倫理的配慮

本調査は、所属研究機関の倫理審査を受け、アンケートを実施した。調査は無記名とし、返信用封筒にて返送されたものを同意が得られたとした。

## 4. 研究成果

### （1）実態調査の結果

#### ①回答者の概要

小児科研修病院 116 施設 (22.7%)  
 医療職・医師 42 名 看護師 74 名  
 保育士 55 名の有効回答を得た  
 病児・病後児保育室 178 施設 (39.7%)  
 医療職・医師 45 名 看護師 128 名

保育士 137 名の有効回答を得た

#### ②回答施設の概要

##### 小児科研修病院

小児専門病院 6 施設 大学病院 28 施設  
 総合病院 73 施設 その他 7 施設

回答施設の保育士配属は、83 施設 (71.6%)

##### 小児科研修病院における保育士以外の非医療職の配属

チャイルド・ライフ・スペシャリストを配置している施設が 4 施設 (3.4%) あり、そのうち 2 施設はチャイルド・ライフ・スペシャリストのみを配置、1 施設は保育士とチャイルド・ライフ・スペシャリストの両方を配置、1 施設は保育士とチャイルド・ライフ・スペシャリストとホスピタル・プレイスペシャリストの 3 職種を配置していた。また、ホスピタル・プレイスペシャリストを配置している病院は 5 施設 (4.3%) あり、そのうち保育士とホスピタル・プレイスペシャリストの両職種を配置している病院は 3 施設 (2.6%) あった。

##### 病児・病後児保育室

医療機関併設型 122 施設 乳児院型 5 施設  
 児童養護施設型 4 施設 保育所型 37 施設  
 単独型 9 施設 その他 1 施設

#### ③回答保育士の概要

##### 平均勤務年数

小児科研修病院 平均 6.7 年  
 病児・病後児保育室 平均 4.9 年

##### 他保育施設経験者

小児科研修病院 42 名 (76.4%)  
 病児・病後児保育室 111 名 (81.0%)

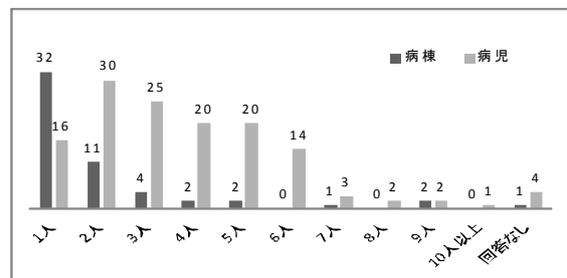
##### 保育士の雇用形態

小児科研修病院 常勤 34 名 非常勤 17 名  
 その他 3 名

##### 病児病後児保育室

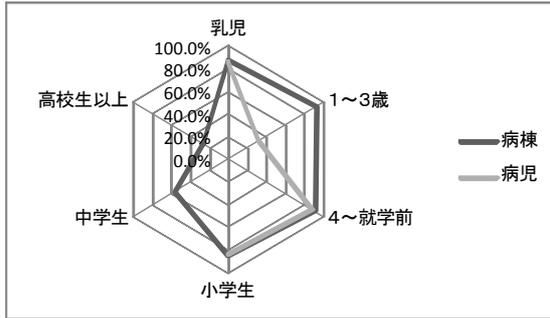
常勤 106 名 非常勤 27 名  
 その他 2 名

#### 保育士の配属人数 (図 1)



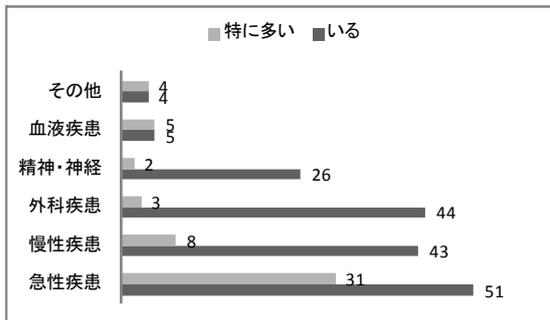
病棟 n = 55 病児 n = 137

保育の対象年齢 (図2)



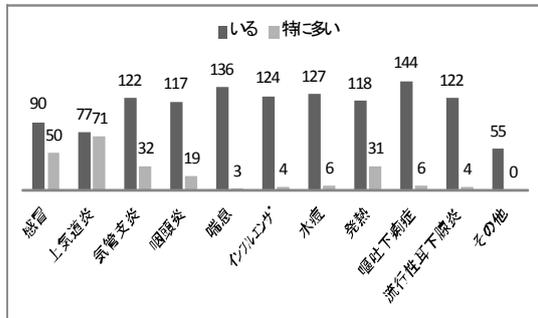
病棟 n = 55 病児 n = 137

④保育の対象となる子どもの疾患  
病棟 (図3)



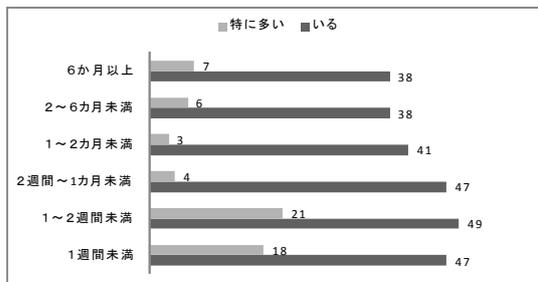
n = 55 (複数回答)

病児 (図4)



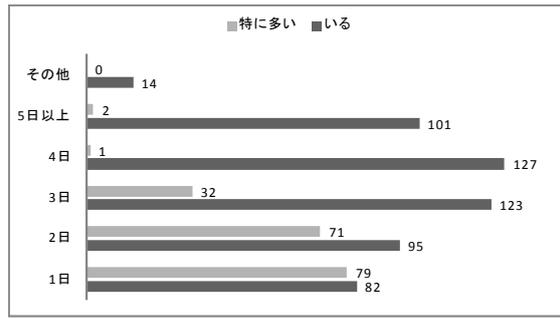
n = 173 (複数回答・医療職回答)

⑤保育の対象となる子どもの期間  
病棟 (図5)



n = 55 (複数回答)

病児 (図6)



n = 173 (複数回答・医療職回答)

(2) 保育内容から考える保育士の専門性

研究(1)で、保育の対象となる子どもの違いが明らかになったことにより、小児科研修病院(以下、病棟とする)と病児・病後児保育室(以下、病児とする)の保育内容にはどのような違いが見られるのか、また、それぞれの専門性を明らかにしたうえで、保育支援のあり方を考えた。

① 保育形態からみる専門性

たとえ子どもが医療を要する状態であっても、保育士は子どもの育ちを見通しその成長・発達を援助することが重要である。その際には、子どもが自ら生活する力を助け、様々な遊びが豊かに展開していくためにその生活環境を構成していくことが保育士の役割であり専門性と言える。研究(1)実態の中でどのような保育を提供していったらいいのか、病棟・病児の保育実践形態をみながら考えていく。

図7は、遊びを通した保育活動の形態(設定保育・自由保育)についての

結果を示した。どちらも保育士による遊びを通した保育活動の時間を設けていたが、病児は午前・午後共に「設定保育<自由保育」であったのに対し、病棟では、午前は「設定保育>自由保育」、午後は「設定保育<自由保育」と時間帯による違いがみられた。これは、保育の対象としている子どもの期間(図5・6)による違いと保育士と子どもの比率の違い、それぞれの施設の特徴からくるものであると考える。

病児保育は、その施設の特徴から短期間(日単位)の利用となるため、一人ひとりに合わせた保育の展開方法として自由保育が多くなること、また、病棟と違い子どもはその日のうちに帰宅することなど、病児に適した午睡の時間の確保を考えると、午後はより自由保育を展開することが多いのではないかと考える。そこで、病児保育室で保育士として求められてくるのは、早い段階での一人ひとりの子どもの特徴を把握した上での環境の変化への対応が求められる。

一方、病棟を考えていくと、入院中は病棟が生活の場となるため、そこでの子どもの育

ちを支える保育が展開されなければならない。そのため子どもの入院期間中が保育の対象となり、日単位から月単位と様々であるが病児保育に比べると長期的な関わりになる。保育者は、その中で、それまでの一人ひとりの育ちを考慮し、子ども同士の関係構築や集団の中での育ちを支えていくことが必要になってくる。そのため、集団保育に参加できる子どもを対象とした保育活動の時間を設け、その中で設定保育や自由保育を展開しており、病児に比べその必要性が高いと考える。

更に、病児・病棟共に異年齢保育は必須であり、加えて年齢の幅も広い（図2）ことが医療保育の特徴であり、そこでの保育を展開する力が保育士として求められる。

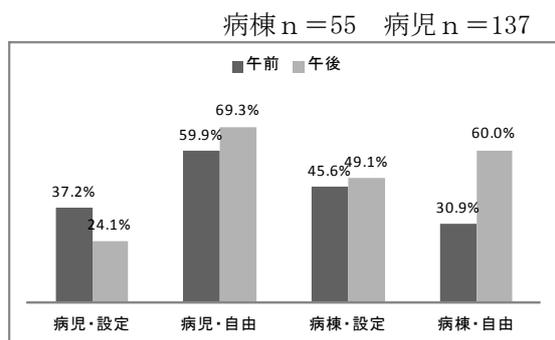


図7 遊びを通した保育の形態

また、図8に個別保育のみを行っている結果を示した。これは、医療に携わる保育の特徴でもあり、病児・病棟の主な疾患にも違いがみられるように、それぞれの施設の特徴を踏まえ、さらには成長・発達と病状・症状に合わせた保育を展開するにあたり、高度な専門性を求められるところでもあると考える。さらに分析を進めていく中で、保育士の観察や気づき、情報をどのように保育展開へ繋げていくのが重要であると考えられる。

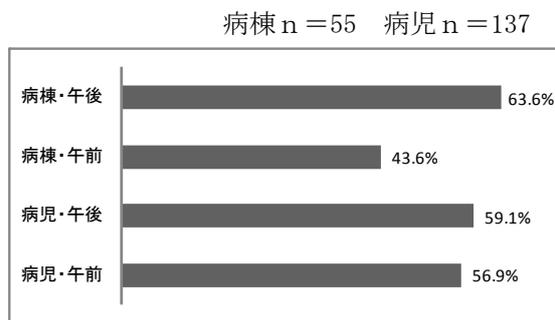


図8 個別保育のみ実施

②保育業務内容からみる専門性

図8、図9は、「改訂保育所保育指針」の解説書の中の6つの保育士の専門性（子どもの育ちを見通しその成長・発達を援助する技術、子どもが自ら生活していく力を助ける生

活援助の知識・技術、保育の環境を構成していく技術、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、子ども同士の関係構築の知識・技術、保護者等への相談・助言に関する知識・技術）をもとに行われている保育と、医療機関の特徴である業務を加えた実践内容についての結果である。

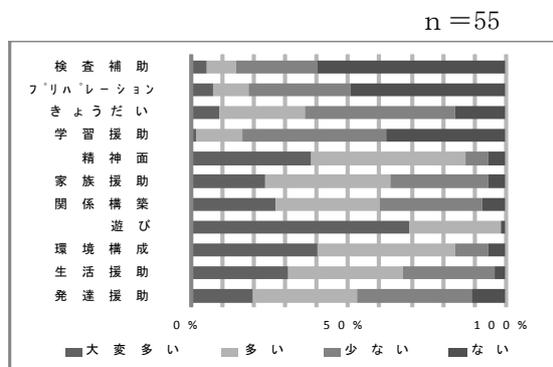


図9 病棟での保育業務

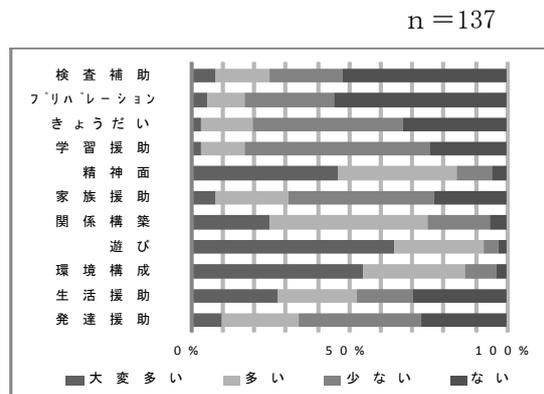


図10 病児保育での保育業務

この結果をみていくと、「少ない」を含め実践している業務は保育士の専門性として挙げられている6つは、両施設とも70%以上が実践されていることが分かる。

さらに、病児・病棟と比較すると、(2)①でも述べたように、対象となる子どもの期間により実践内容にもそれぞれの特徴があると考えられる。それは、発達支援と生活援助であり、長期を対象としている病棟保育の方がより発達支援していく中で生活そのものを援助していく必要性があると考えられる。

また、医療に携わる保育士として特徴的なのは、不安やストレスを軽減する精神面の援助、家族援助の中でもきょうだいへの支援、学童への学習支援を半数以上の施設で行われていることがわかった。そしてこれは、実践している業務に対して、保育士が考える保育業務にも同じような傾向がみられていた。しかし、保育士が考える保育業務に対して業務実態を比較すると必ずしも実践できてい

るわけではないことがわかった。これは医療に携わる保育の専門性の特性と今後の課題が示唆されていると考える。

そこで重要なのは、保育士としての専門性を発揮した上での保育実践になるが、それは、医療現場における保育ニーズが何であるかを他職種からみた保育士を分析していく中で考えていきたい。

### (3) 他職種を通してみる保育士

#### ①医療職が期待する保育業務

小児医療をすすめるにあたりトータルケアを目指した医療を提供していくことが大切であるが、医療現場では保育士も医療チームの一員として自覚し協働していかなければいけない。そこでは、保育士も他職種と目標を共有化していく中で専門性を発揮し保育を提供していくことが求められる。

(2) ②に保育業務実践の結果を示したが、これらは、保育士のみが行っているのではなく、看護師やチャイルド・ライフ・スペシャリスト、ホスピタル・プレイスペシャリスト他、多くの医療従事者との協働があつてはじめて医療現場でも子どもの育ちを支えていくことができる。

ここで、図 11、図 12 で医療職が期待する保育業務の結果を示す。

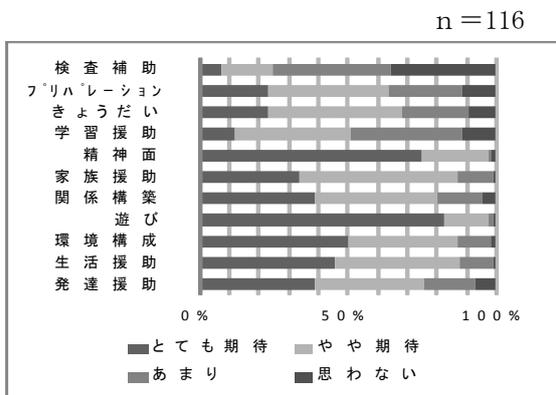


図 11 医療職が期待する保育業務・病棟

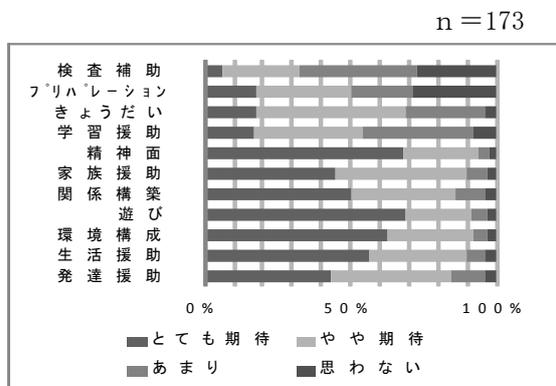


図 12 医療職が期待する保育業務・病棟

この結果からみていくと、6つの専門性は、やや期待・とても期待を合わせるとそれぞれ多くの医療職も保育士に期待しており、実践結果でも高かった子どもの精神面での援助に対しても期待していることがわかった。一方それに比べて低かったのが、プリハレーション、検査や処置の補助、病棟での学習支援であった。これらは、保育士以外の非医療者の院内学級の教員やチャイルド・ライフ・スペシャリスト、ホスピタル・プレイスペシャリスト、または看護師に期待しているのではないかと考えられる。

#### ②保育記録を通してみる保育士

効果的かつ正確にお互いの情報を共有していくためには記録を媒体とした情報の活用が必須であるが、「保育の内容を記録として残しているか」の問に対しては、病棟が 49 名 (89%)、病児が 122 名 (89%) 「はい」と返答していた。それに対して保育士と働いたことのある病棟の医療職に対して「保育中の気づきを保育記録で確認したか」の返答は、医師は 7 名 (23%)、看護師 2 名 (4%) と非常に低い結果となった。それに対して病児では、医師 22 名 (49%)、看護師 99 名 (77%) と病棟と比較して高く、特に看護職に差がみられた。

病棟と病児では差はみられたが、この結果は、保育記録として記載している記録が他職種との連携という視点からは活かされておらず、チーム医療の中での専門職としての方法と内容の部分で課題が多く残っていると考える。これは保育職としての以前から課題として言われていた点である。チーム医療という組織の中で質の高い保育の提供と専門性を発揮していくためには、保育支援の過程が他職種にもわかりやすく客観的に示すためにも保育記録の充実化を図り、さらにカンファレンスへの参加などさらなる協働を保育士自らが推進していくことが重要だと考える。

#### (4) まとめ

「子どもが訪れる医療機関に保育士は必要か」という医療者への問に対しての結果は、病棟においては、「必ず必要・望ましい」を合わせると 97%、保育士と勤務経験のある医療者に限ってみていくと 100%であった。病児においては、「必ず必要・望ましい」を合わせると 80%、「保育士以外でも可能」は 9%であった。病棟・病児ともに「わからない・その他」の内容をみていくと、一般の診療所で保育士を採用するには経費の問題で難しいのではないかと、全ての医療機関で必要だとは思わないという回答であった。

(1) から (3) の結果、さらに (4) の結果を踏まえると、医療現場での保育士の

位置づけと業務内容は認識されており、組織的にも位置づけされていると考える。しかし、他職種からみた保育士、特に協働という視点では多くの課題がみえてきた。

現在の保育士養成課程の中では、医療現場で働くための医療・看護的な知識と技術を修得することは難しく、現任の保育士の多くは、現場に出てから一人ひとりの保育士が日々の保育の実践の中で必要な知識と技術を修得し自己研鑽に努めている。また、一人職場、もしくは少人数で保育を提供している施設が多いため、各々の保育士が現場で抱えている疑問や課題を解決しながら学びを深められる場が日常の保育の中では少ないことも自由記述から見えてきている。そのため、個々の保育に差がでてしまっているのが現状である。今回の研究から現状と課題、方向性を導き出すことはできたが、そこからモデル構築には至らなかった。

そのため、今後は今ある専門職としての基盤をもとに医療チームの中での保育士の存在と役割が意義のある専門職となるためには、学びの場の提供と同時に、研究当初の目的であった保育士の介入方法及び保育支援過程について分析し、モデル構築を試みていく中で医療保育のあり方について明確にし、医療保育全体の質の向上を図っていくことが重要であると考えます。

研究の成果は、今後も関連学会などで発表する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①高橋みゆき、林典子、小児病棟における感染対策、小児看護、査読有、33巻、2010、1051-1057

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 みゆき (TAKAHASHI MIYUKI)

聖徳大学短期大学部・保育科・講師

研究者番号：90528291

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし